

「新市史」近現代一節「戊辰戦争」トピックス

（1）幕末から明治維新期の土佐の志士たち

幕末から維新期にかけて激動の日本で、土佐藩では、郷士などの下級武士や庄屋層の中で、志を持って新しい時代を切り開くことをめざして革命を実行した人々＝「志士」たちが活躍した。

土佐藩内でも、尊王攘夷を推し進めようとする武市半平太（1829～65）は、土佐勤王党を結成し、郷士などの下級武士や庄屋層の支持を得た。これに対して前土佐藩主・山内容堂は、公武合体論を掲げ、武市らの主張と一線を画した。この頃、京都では「天誅」（天罰として殺人すること）を合言葉に暗殺や集団リンチ事件が多発した。「人切以蔵」と恐れられた岡田以蔵（1838～65）も、土佐勤王党の一員でそれに関わった一人である①。

幕府の謹慎を解かれた山内容堂は、土佐勤王党を弾圧する。武市を投獄し、切腹を命じた。これを受けて脱藩しようとした安芸郡の郷士清岡道之助（1833～64）ら23人は、甲浦で捕縛され、奈半利の河原で処刑された。これにより土佐勤王党は完全に解体された。

この土佐勤王党の流れを汲む人々は、土佐藩の政治に見切りをつけ、脱藩したり、藩外の勢力と組んで自分たちの主張を押し通そうと奮闘した②。

坂本龍馬や中岡慎太郎は、薩摩藩や長州藩との関係を持ち、その同盟の成立に尽力した。吉村虎太郎（1837～63）、那須信吾（1829～63）らは、脱藩後に公家中山忠光を頭首に天誅組を結成し、天皇の大和行幸を企てるが、実現できず、挙兵して大和で討死した③。

また、平井収二郎（1835～63）、弘瀬健太（1836～63）、間崎哲馬（1834～63）らは、青蓮院宮の力を借りて藩政改革に圧力をかけようとして処罰され、切腹を命じられた。

幡多郡中村（四万十市）の下級武士の家に生まれた樋口真吉（1815～70）は、19歳で学問を志し、剣術や砲術を学んだ。ペリーが浦賀に来航すると、藩命を受けて須崎浦（須崎市）や幡多郡域（四万十市・土佐清水市など）に砲台を築造した。土佐勤王党に属してはいたが、無謀な行動を自重するよう黨員に指導した。安芸郡の郷士清岡道之助は幡多郡の樋口に「幡多郡と安芸郡に居住する勤王党の志士たちが、東西呼応して脱藩し、藩に実力行使を」と呼びかけたが慎重な樋口はこれを断っている。彼は戊辰戦争において新政府軍の後方支援に回り、会津戦争では土佐藩軍に最新兵器を調達した④。

志士の中で明治時代まで生き残った者は、この樋口真吉や田中光顕（1843～1939）などごく少数であり、脱藩の志士たちは、その多くが非業の死をとげている。彼らは、あまりに急進的で、強引に物事を進めてしまう血気盛んな傾向が強く、誤った方向の

活動も多々見られたが、郷士や庄屋層といった最末端の藩士として市井を間近に捉え、感じることも多く、この期を逃しては改革の火が消えてしまうとの切羽詰まった危機感があったに違いない。その焦りが彼らの気持ちを頑ななものとしたのではないだろうか。その方法論はともかく、彼らの思いは極めて純粹だったのではないかと推測する。

(2) 戊辰戦争に至るまでの経緯

慶応三年（1867）10月14日、将軍慶喜は二条城にて大政奉還を表明、翌日にそれを朝廷に上奏した。このセオリーは坂本龍馬が長崎から京都に向かう船上で考えたいわゆる「船中八策」の一つだった。後藤象二郎を通じて山内容堂に伝えられ、容堂の提案として将軍慶喜に呈上された。将軍慶喜は自分が新政府の中心で活躍できることを見返りとして大政奉還を決意したのである。

12月9日、薩摩・土佐・尾張・越前・安芸の五藩兵が宮門を警備するなかを、王政復古の大号令が発せられた。そして、新しく総裁・議定・参与の三職が任命された。大号令に引き続いての三職会議にて将軍慶喜に辞官納地を命じ、それが二条城の将軍慶喜に伝えられた。慶喜を擁護しようとする山内容堂と松平春嶽の政治生命は、岩倉具視らに妨害・阻止され、ここで断ち切られた。

慶喜は騒然とする幕臣たちを抑え、混乱を避けるために大坂城に移動した。新政府側は、将軍慶喜復権のために動く「山内容堂・松平春嶽グループ」と幕府を武力で制圧しようとした「薩長グループ」の指導権争いが激化し、その政治的駆け引きが続いた⑤。

将軍慶喜の大政奉還により武力制圧の口実を失った薩摩藩は、江戸に藩士を派遣し、江戸市中にて作為的に世情不安を煽った。御用金の強奪、犯罪行為などを続発させ、治安悪化を図った。江戸市中の警備を担当していた庄内藩は、薩摩藩が治安悪化の元凶であることをつきとめ、老中に許可を得て、12月25日、江戸薩摩藩邸を砲撃し、焼き討ちを強行した。

この報が大坂城の慶喜にもたらされたのは、12月28日のことであった。事ここに至って慶喜は、幕臣たちの薩長との主戦論を抑えることができなくなった。そこで「討薩の表」を朝廷に提出し、薩摩藩討伐を奏上した。都へ上る会津・桑名両藩兵を主軸とする徳川軍と薩長土藩兵を中心とする政府軍は、伏見と鳥羽で対峙した。幕府軍は大坂城常駐軍約5,000人を加え約15,000人、それに対して連合の政府軍は5,000人弱で兵力自体は旧幕府軍の僅か3分の1に過ぎなかった。戦いは、一進一退の状況だったが、政府軍の大砲など武器の性能が優れていたことと、政府軍が「錦の御旗」を掲げていたことが勝敗の機運を決定づけた⑥。「錦の御旗」は、それ自体が官軍＝正義を示し、それを攻撃する軍は自動的に賊軍となったのである。形勢不利と見た慶喜は、味方をも欺き、大坂城を脱出し、幕府軍艦・開陽丸にて海路移動し、江戸城に入った。

鳥羽伏見の戦い（1868）から翌年榎本武揚（1836～1908）らが五稜郭に立てこもり抗戦した箱館戦争までの約一年にわたる新政府軍と旧幕府軍の内戦を戊辰戦争と呼ぶ。この戦争に土佐藩から約2,700人（兵士と軍夫）が参加し、戦死者は100人を超

えた。関東から新潟・福島にかけて、このとき参戦した土佐藩兵の墓碑があっちこちに散見される。

(3) 戊辰戦争に参加した土佐藩「迅衝隊」

慶応4年(1868)1月、土佐藩に讃州高松藩・予洲松山藩の追討命令が新政府から下された。

土佐藩は、本藩家老・深尾丹波を総督、乾退助(板垣退助)を大隊司令に任命し、迅衝隊を組織させた。そして、高松藩制圧に出陣した。このときの兵力は正確な人数は不明であるが、約870人であった^⑦。そこには片岡健吉、谷干城などの俊傑も幹部として名を連ねていた。

また、別同隊として本藩家老・深尾左馬之助を総督、佐川家老・深尾形部を副総督として松山藩制圧に約二千人余りで出陣した^⑧。これらの藩兵の活躍と「錦の御旗」の御威光により、四国の高松・松山両藩を新政府に恭順させ、天領・川之江を統治することに成功した。

その後、迅衝隊は、京都を経て、江戸、会津と転戦した。慶応4年(1868)1月26日、討幕論の乾退助(板垣退助)は上坂し、京都に駐留する山内容堂の説得にあたった。結果、容堂は新政府軍の一団として江戸東征に迅衝隊に参加させることを渋々認めた。同年2月3日、仁和寺宮嘉彰親王が征討大將軍となり、京都を起点に東海・東山・北陸の三道から進軍した。土佐藩は、東山道先鋒総督府に属し、乾退助(板垣退助)はその参謀に任ぜられた。迅衝隊の兵力は12小隊・兵隊輜重隊を合わせて1,500人余りであった。この軍隊は東征の途上で一五小隊・砲隊・本営・病院・鉄砲隊・輜重隊に増強・改編された^⑨。樋口真吉は、裏方として舞台への物資補給に従事した。

迅衝隊は、3月6日に近藤勇率いる甲陽鎮撫隊を勝沼(現在の山梨県)で撃破し、14日には江戸の内藤新宿(現在の東京都新宿区)に着陣、18日から尾張藩邸に駐屯し、江戸市中の警備にあたった。23日には宇都宮に遠征して敵陣を説得・撤去させ、東照宮を守るため日光での戦火を避けた。この間、甲州にて乾退助は、板垣退助と改姓している。

6月に入り、板垣退助は、大総督府下参謀となり、迅衝隊は薩長に協力して共同で出陣して白河城を占領した後、東北制圧に参戦する。以下が東北遠征の概要である^⑩。

慶応4年(1868)

- 6月24日 棚倉城攻略
- 29日 湯長谷城攻略
- 7月13日 平城落城
- 26日 三春城恭順
- 29日 二本松城落城、長岡城落城
- 8月21日 政府軍(薩長土)母成峠を越えて進軍
- 22日 十六橋を奪う。
- 23日 若松城下に進軍、若松城三の丸を突破、抵抗する会津軍との激しい

戦闘で土佐藩迅衝隊にも戦死者が出た。

9月22日 白虎隊の悲壮な最期

下旬 東北戦争の終結

10月24日 芝増上寺の土佐藩本陣に帰着

11月1日 天皇より板垣退助、谷干城らが天杯を賜る。

11月 下旬 土佐藩迅衝隊、土佐へ帰還

この戊辰戦争に出征した土佐藩兵は、総数2,717人、うち戦傷者は1,688人、戦死者は106人であった^⑩。参戦した土佐清水市域出身者の氏名・出身地域を列挙する。

- | | |
|----------------|--------------------|
| (1)上原正忠 (清水) | 清水浦居住郷士・土族家禄 10石3斗 |
| (2)亀谷正雄 (窪津) | 窪津浦庄屋系・土族家禄 11石4斗 |
| (3)谷本忠一郎 (窪津) | 窪津浦庄屋系・土族家禄 3石7斗 |
| (4)田辺家豪 (下ノ加江) | 下茅浦居住郷士・土族家禄 5石5斗 |
| (5)浜田信行 (清水) | 清水浦庄屋系・土族家禄 3石7斗 |
| (6)矢野川正明 (三崎) | 三崎村地下浪人・土族家禄 7石7斗 |
| (7)沖清之助 (布) | 布村居住郷士・土族家禄 14石5斗 |
| (8)沖 良賢 (三崎) | 三崎村庄屋系・土族家禄 11石5斗 |
| (9)沖 良澄 (布) | 布・立石村庄屋系、16歳にて参加 |

彼らは迅衝隊四番隊（郷士）と迅衝隊12番隊（庄屋・浪士）に所属して従軍した^⑫。なお、彼らの詳細については、中山進「四．近世」（旧『土佐清水市 上巻』土佐清水市、1980年、738～740頁）を参照いただきたい。

註

- ① 高知県郷土史副読本編集委員会『中高生が学ぶ・ふるさと高知の歴史』高知県教育委員会、2018年、94～95頁。
- ② ①に同じ。
- ③ ①に同じ。
- ④ ①に同じ。
- ⑤ 山崎善啓『幕末維新・四国各藩の動向と選択』高知新聞総合印刷、2013年、13～15頁。
- ⑥ ⑤に同じ。15～22頁。
- ⑦ 山崎善啓『幕末・土州松山征伐進軍記録』高知新聞総合印刷、2012年、52頁。
- ⑧ ⑤に同じ。123頁。
- ⑨ ⑤に同じ。108～111頁。
- ⑩ ⑨に同じ。
- ⑪ ⑨に同じ。
- ⑫ 中村春利「七 近代・現代」（『土佐清水市史 上巻』土佐清水市、1980年、1047～1050頁）